

# 慈円と源頼朝の贈答歌

——「壺のいしづみ」詠の漢籍受容について——

北 山 円 正

一

『新古今集』には、鎌倉幕府初代将軍源頼朝の歌を二首載せている。その一首は、慈円に宛てた歌である。

前大僧正慈円、ふみにては思ふほどのことも申し尽くしがたきよし、申しつかはしてはべりける返事に

前右大将頼朝

みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬ書き尽くしてよ壺のいしづみ（巻十八・1786・雑歌下）

慈円の『拾玉集』から採った歌である。その詞書によれば、建久六（一一九五）年三月四日、頼朝が東大寺の再建供養に結縁するために上洛し、内裏・六波羅で対面して交流を深め、その中で和歌・消息の応酬をしている。その歌数七十七首。男女の恋歌とみてよいやり取りがつづいており、その中に1786番歌がある。直接には前日の贈答を承けて、

その翌日、自ら彼また申し遣したるをみれば

あひ見てし後はいかごの海よりも深しや人を思ふころは  
(5443)

返し

頼むこと深しといはばわたつ海もかへりて浅くなりぬべきか  
な (5444)

副へ遣す歌

思ふこといなみちのくのえぞ言はぬ壺のいしづみ書き尽くさ  
ねば (5445)

たちかへり、また返しに

みちのくのいはでしのぶえぞ知らぬ書き尽くしてよ壺のいしづみ (5446)

凡此人、如<sup>レ</sup>此贈答之人、尤希有歟。羊僧始為<sup>二</sup>対揚<sup>一</sup>。尤為<sup>二</sup>珍事<sup>一</sup>。為<sup>二</sup>珍事<sup>一</sup>。

とやり取りする中の一首である。、頼朝から、初めて会ってからあなたは思う心は海よりも深いと送る。慈円は、あなたを頼みにする心の深さからすれば、かえって海などは浅いものと詠み、

これに添えて、あなたへの思いは言い尽くせないと応じている。すると頼朝から折り返し、こらえたりせず語り尽くしてくださいと求めている。

慈円は頼朝の和歌を評して、このように「贈答」をする人は「希有」であるとも、「珍事」であるとも称えている。<sup>(1)</sup>東国の人にしてはよくできているという、褒めことばなのかもしれないが、それだけでは以後七十首もの贈答にはならないだろう。東国の覇者への配慮を含むものの、力量への評価があると見なすべきである。

頼朝の歌についての解釈には、

古抄云、前大僧正慈円、ふみにてはおもふ程の事も申つくしかたきよし、申つかはして侍ける返事にと、詞書也。坪の石文とは、昔田村將軍陸奥の坪といふ所に、石に日本の中央也と石に碑文をかきしより、坪の石ふみと云也。哥のこゝろは、くわしくふみにつくし給へとなり（加藤馨齋『新古今増抄』）

陸奥国の磐手・信夫郡ではないが、言わずにこらえているなど私には理解できません。壺の碑ではないが、悉皆文にして書き送ってください（田中裕・赤瀬信吾校注、新日本古典文学大系『新古今和歌集』・岩波書店）

陸奥の岩手や信夫といった歌枕ではありませんが、いわないでがまんしているとおっしゃるのはよくわかりません。すっかりお気持ちを書き尽くしてください。壺の碑ならぬお文

に……（久保田淳『新古今和歌集全評釈』・角川書店）

のように、慈円からの贈歌に、「ふみにては思ふほどのことも申し尽くしがたきよし」とあるのを承けて、くわしく文に尽くしてほしいと返しているところある。他の注釈書もほぼ同様の解釈をしているようである。また数多くの注釈書は、『袖中抄』以来問題になることが多いからか、歌枕「壺のいしぶみ」への関心が高い。<sup>(2)</sup>それはともかく、注解としてはなお付け加えるべき点がある。そこで『新古今集』の頼朝詠だけではなく、『拾玉集』にある慈円の贈歌も含め、両歌に共通する表現をめぐって、その出典を指摘しておきたい。

## 二

慈円の歌は、「思ふこと」を「えぞいはぬ」表現することができないという——副詞の「え」と係助詞「ぞ」に「蝦夷」を掛けている——。それは、「壺のいしぶみ」ではないが、「ふみ」に書き尽くせないからだと説明している。『新古今集』の詞書「文にては思ふほどのことも申し尽くしがたきよし、申しつかはしてはべりける返事に」は、その事情をあらわしている。当然のことながら、「いしぶみ」に「文」を掛ける。文（和歌）では我が思い——恋情と言うべきか——は示しきれないのだと、「文」の限界を訴えている。

頼朝は返歌の作法として、慈円のこの表現・語彙を踏まえる。

すなわち、思いを伝えずにこらえているなどとは、理解できぬことと言ひ返す。慈円の歌には「しのぶ」に相当する語はみえないが、「みちのく」「えぞ」を承けて、「いはぬ」を歌枕「岩手」に変え、さらに「しのぶ（信夫）」「えぞ（蝦夷）」とつづけた。そして、「書き尽く」せないなどと言わず、「壺のいしづみ」ではないが、「書き尽くしてよ」と求めている。ここでも「いしづみ」に「文」を掛けている。戯れのやり取りではあるものの、慈円の趣意を受け止めて巧みに返したといえるであろうか。「いはぬ」を「岩手」と詠みかえた点も含めて、慈円は評価したはずである。

内容は、用談の上の返事程度のものであるが、詠み方は達者なものである。流人の武将がいつ身につけたのかと思わせる（窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』・東京堂出版）と評するのも、そのあたりを踏まえるからであろう。

それでは、両歌に共通する出典について述べる。慈円が、「文」では「思ふこと」を「書き尽く」さないといい、頼朝が、「ふみ（文）」に「書き尽くしてよ」と応じたのは、

子曰、書不尽言、言不尽意。然則聖人之意、其不可見乎  
（『周易』繫辭上伝）

子曰はく、書は言を尽くさず、言は意を尽くさず。然れば則ち聖人の意は、其れ見るべからざるか。

にもとづく。孔子の問題提起である。書き記したものは言いたいことを述べ尽くしていない、ことばは思いを表現し尽くしていない。

い。さすれば聖人の心の内は知ることができないのかと。問いかけである。

両者の歌は「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意」を応用している。慈円は「ふみ書き尽くさ」ないので（書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言）、「思ふこと」（「意」）を「えぞ言はぬ」（「言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>」）と、心の内を言い尽くせないと訴える。対する頼朝は、思いを「ふみ」に「書き尽くしてよ」と求める。この表現は、「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言」とは言うものの、それでも「書」によって思いを「尽」くしてほしいと懇望している。つまり、「尽」くしがたいものだが、それでも「意」をすべて示してほしいと、難題を突き付けているのである。

『周易』の示す道理をそのまま用いるのではなく、逆に訴えかける表現に転じているのである。同じ語や表現を用いながらも、巧みに相手への要望を詠った手法も称えられた点なのである。なお頼朝は『周易』の表現を知らずとも、返歌が可能だったといえるであろうが、慈円の歌句を一見して、たちどころにその典拠を察知したはずである。この表現は、官人・文人および漢字に触れた者なら常識であったとみてよい。頼朝も『周易』の表現を知った上で、贈歌に応じたと考えるべきであろう。

なお、『新古今集』の頼朝詠詞書「ふみにては思ふほどのことも申し尽くしがたきよし」も、『周易』の「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意」を踏まえた表現である。歌集採者もこの典拠を承知していたことであろう。

それでは慈円と頼朝は、直接『周易』をもとにして詠ったと考えてよいかというところ、そうばかりとも言えない。詠作の事情はさほど単純ではないと思う。もちろん表現の原拠として想起していたのはまちがいない。ただ、「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言」云々をそのまま引いたり、多少の語句を変えたり、同旨の表現を用いた例は散見するのであり、これもまた二人の詩囊に貯えられていたはずである。次にはそれらを引きながら、二首の表現に何らかのかかわりを持ったであろうことを述べてみたいと思う。

書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>懷、植白（『文選』卷四十二、魏の曹植「与<sub>二</sub>楊徳祖<sub>一</sub>書」）

は、書簡の末尾によく用いる、この便りでは言いたいことを述べ尽くしていないという決まり文句である。

良<sub>二</sub>増<sub>一</sub>邑邑。因白。不<sub>レ</sub>悉<sub>レ</sub>瑳白（同卷四十二、魏の応璩「与<sub>二</sub>満公琰<sub>一</sub>書」）

の「不<sub>レ</sub>悉」（悉<sub>く</sub>さず）は「不<sub>レ</sub>尽」と同じ意味であり、これによって書簡を結んでいる。書簡の文体の慣用表現として通用していたのである。

有<sub>二</sub>雷同君子<sub>一</sub>。問<sub>二</sub>於違<sub>レ</sub>衆先生<sub>一</sub>曰、世之論者、以為<sub>二</sub>言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意<sub>一</sub>、由来尚矣。至<sub>二</sub>乎通才達識<sub>一</sub>、咸以為<sub>レ</sub>然（『芸文類聚』卷十九・言語、晉の歐陽建「言<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>論」）

これは『周易』の語句を引いて、ことばの不足を述べるものであ

り、書簡以外に用いている。今に到るも識者は賛同するとある。

以上は六朝時代の例。唐代では、次のような例がある。

每推聖祖垂<sub>レ</sub>訓、貽<sub>二</sub>厥孫謀<sub>一</sub>。聽理之余、伏勤<sub>二</sub>講誦<sub>一</sub>。今復一<sub>二</sub>詮<sub>二</sub>疏其要妙<sub>一</sub>者、書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言。粗<sub>二</sub>拳<sub>二</sub>大綱<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>神<sub>二</sub>初學者<sub>一</sub>爾（『全唐文』卷四十一、元宗「道德真經疏釈題詞」）

每<sub>二</sub>於篇首<sub>一</sub>、各陳<sub>二</sub>体例<sub>一</sub>、書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意、豈及<sub>二</sub>多陳<sub>一</sub>。文外幽情、寄<sub>二</sub>於輪廓<sub>一</sub>。後之同好、幸<sub>二</sub>悉<sub>二</sub>予心<sub>一</sub>（同卷一五九、李君球「乙巳占序」）

前者は、書物はことばのすべてを表現するのではないが、大綱を示して初学者に益したいという。後者は、所詮書物が思いのすべてを描くのではないから、多言はしない、言外のそこはかたない思いを汲み取ってほしいと述べている。

もともと『周易』の「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意」は、結局は聖人の意中を知ることばできないのかという、疑問から発せられたことばであった。それが右の例から明らかなように、表現における不如意を語る語句として、さまざま局面で用いられるようになったのである。

## 四

次には日本における使用例を取り上げて、慈円・頼朝の和歌における応用に到るまでの経緯を述べてみたい。古い例には、……但依<sub>二</sub>両君大助<sub>一</sub>、傾命纒<sub>レ</sub>繼<sub>レ</sub>耳（筆不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、古今所<sub>レ</sub>

歎) (『万葉集』卷五・793、「大宰帥大伴卿報凶問」歌)。

神龜五(七二八)年六月二十三日)

がある。大伴旅人が、訃報に接して返答した書簡に、私の思いは、筆によつては言い尽くせないと思ひを述べている。「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言」と同じことである<sup>(3)</sup>。

古人有<sub>レ</sub>言、書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意。又言得<sub>レ</sub>魚忘<sub>レ</sub>筌、得<sub>レ</sub>意忘<sub>レ</sub>文。然則文章之難、聖人攸<sub>レ</sub>歎(『政事要略』

卷三十・阿衡事、「勸<sub>二</sub>申阿衡<sub>一</sub>事」。橘広相の文章。\*

「尽」を、国史大系は「書」に作るが、「盡」(「尽」の旧字体)の誤写とみて改めた。仁和四(八八八)年)

「阿衡」の職掌について、広相が「无<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>統」と再度勸申し、その後「周易」の文を引いて、真意を伝える難しさを吐露する件である。自身の見解が受け入れられないことへの苦悩が滲み出ていると言えようか。

勸<sub>二</sub>丞勲<sub>一</sub>還。書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言。謹状(『本朝文粹』卷七・185、

菅原文時「為<sub>二</sub>右丞相、贈<sub>二</sub>大唐吳越公<sub>一</sub>書状」。天曆七

〔九五三〕年七月)

は、帰国する呉の蔣丞勲に託した、右大臣藤原師輔から「呉越王」への返書の末尾。書状・進物への感謝を述べており、その結びに、決まり文句として用いた例である。

此趣令<sub>二</sub>美濃守<sub>一</sub>為<sub>二</sub>憲朝臣<sub>一</sub>草<sub>二</sub>之也。中心所<sub>レ</sub>思、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>叢<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>志歎(『権記』長保元(九九九)年八月

二十六日。「叢」は、こまかに、つまびらかにの意)

は、藤原行成が、亡友源宣方の供養のために不動尊像を画き、これに添えた識語(由緒)。宣方への思いを詳しく表すことはできないと感じ、「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>志歎」と思い至っている<sup>(3)</sup>。

今又遇<sub>二</sub>此闕<sub>一</sub>、臣已<sub>レ</sub>当<sub>二</sub>其任<sub>一</sub>。誰人敢<sub>レ</sub>比<sub>二</sub>肩<sub>一</sub>、何輩更<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>功。

早<sub>二</sub>以<sub>三</sub>松容<sub>一</sub>之次<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>蘇心<sub>一</sub>之鬱。書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>事、只任<sub>二</sub>賢察<sub>一</sub>而已。頭雅頓首謹言(『朝野群載』卷二、源頭雅「可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>拜<sub>一</sub>任大納言闕<sub>一</sub>事」。長承元(一一三二)年十二月二十日)

中納言源頭雅が、大納言の闕に任じられんことを請う、内大臣藤原宗忠宛の書状である。申文のような内容ともいえよう。自分は誰よりもその任にふさわしいと言いつつも、書面では書き尽くせないで、ただ賢察にお任せしたいと頼み込んでいる。

書簡と言えば、書簡文例集つまり往来物を挙げる必要がある。

但聞不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>広。其間事令<sub>二</sub>思慮<sub>一</sub>給。書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、併

在<sub>二</sub>面展<sub>一</sub>。某謹言(『雲州往来』卷下)

は、行楽を誘っている。ただしあまり話を広げぬようにと断り、書簡では言い尽くせぬので、すべてはお目にかかった時にと、常套の表現で終えている。

視聽所<sub>レ</sub>触、記録在<sub>レ</sub>斯。書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、九牛之一毛也。子細之趣、重期<sub>二</sub>後信<sub>一</sub>。謹言(『釈氏往来』)

高野山御幸の様子は書面では表現しきれず、お伝えした内容は「九牛之一毛<sup>(6)</sup>」のようなもの。子細については後便で述べたいとある。

尽日会賦<sup>二</sup>一首。令<sup>二</sup>同道<sup>一</sup>給哉。且文庫之地形、可<sup>二</sup>申合<sup>一</sup>也。書不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>言。不具謹言（『貴嶺問答』）

嵯峨野の「棲霞寺」への「同道」ならびに同寺での賦詩を誘い、さらにこの地に建てるつもり「文庫」について相談を持ちかけられている。そしてこの手紙では言い尽くせぬと述べて書き終えている。

往来物の例として挙げた、守覚法親王の『釈氏往来』と中山忠親の「貴嶺問答」は、慈円・頼朝と同時代の著作である。さらに同じ頃の例を加えておく。

如<sup>レ</sup>此ノ事等、書不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>言。以<sup>レ</sup>人可<sup>レ</sup>申之處、定無<sup>二</sup>其隙<sup>一</sup>歟。無<sup>レ</sup>止且先獻<sup>二</sup>愚札之状<sup>一</sup>。謹言（勝賢「建久二年辛亥祈雨日記」）。建久二年は一九九一年）

「如<sup>レ</sup>此ノ事等」は、書名にある「祈雨」の修法。この依頼の趣は、書札では言い尽くせない。よって人を遣わして申すべきであるが、暇のなきを慮つて書簡をたてまつると末尾に認めている。

王者之忝<sup>レ</sup>政、雖<sup>レ</sup>非<sup>二</sup>偏頗<sup>一</sup>、人倫之愚習、奈<sup>二</sup>何其恨<sup>一</sup>。欲<sup>レ</sup>述<sup>二</sup>愁緒<sup>一</sup>、詞咽<sup>レ</sup>涙、欲<sup>レ</sup>拳<sup>二</sup>訴状<sup>一</sup>、鬱余<sup>レ</sup>筆。仍書不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>言。泣勒<sup>二</sup>大概<sup>一</sup>而已（『鎌倉遺文』一一九七、「東大寺僧綱等解案」。建仁元（一一〇一）年四月）

所領について東大寺僧綱から院庁に出された解文である。失った土地について述べようとすると涙に咽び、訴えようとすると筆にあまりほどである。したがってここに書き切れるものではなく、おおよそを記すばかりだと述べている。申請書の中の一例である。

仮名文での使用例をみておきたい。

忘れがたく口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれとく破りてむ（『土左日記』承平五（九三五）年二月十六日）

日記の末尾である。五十日余の旅のありさまや折々の思いを書き終え、擱筆するに当たつてその時の感慨を綴っている。とても表現し尽くすことなどできぬと、空しさや限界を痛感している。

「え尽さず」としかないが、「書不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>言、言不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>意」を踏まえ、その道理を敷衍・応用した表現であるといえよう。なお、仮名文における例は少ないようである。

## 五

慈円・頼朝が自詠に取り込んだ、「書不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>言、言不<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>意」（『周易』繫辞上伝）および、中国・日本におけるその受容例を、書簡・勸申・識語・申文——申文に類似したもの——・解状などについて一瞥した。なお、仮名文はわずかに『土左日記』の一例を知るのみである。紀貫之の場合は、官人・文人であることから、おのずと生まれた表現といふべきであろう。また和歌の例は、平安時代以前では未見である。その点では、二人のこの表現は、歌人らには新奇に映つたのではないか。見落としがあるかもしれない。諸賢のご教示を得たい。

『周易』のこの二句は、平安時代から鎌倉時代にかけての官

人・文人にとつては、常識であつたにちがいない。また、二句を引いた文章や、この道理を応用した表現に、しばしば接したはずである。慈円と頼朝は、いつ知らずこの表現を身に付け、和歌贈答の機会を得て詠み込んだのであつた。つまり、典拠を指摘するなら「周易」(繫辭上傳)の二句ということになるものの、直接の典故は特定できないであろう。当時の人々は、慈円・頼朝の贈答歌に接した時、大本の「周易」を想起するのはもとより、そこから派生した書簡の慣用語をはじめとする表現に思い至つたはずである。そして和歌においては珍しい、その表現・技巧に共感したのではないか。

頼朝は平治の乱(平治元(一一五九)年)以後、伊豆国で流人としての暮らしを余儀なくされた。流されたときは十二歳であつたので、すでに源氏の御曹司として相應の教育を受けていたはずである。伊豆国に住んでからも、さまざまな学問を身に付けていたのではないか。年を追うにつれ、教養を備えるようになったと考えるべきであろう。東大寺供養のために上洛するに当たつて、粗野な東国の武人であつてはならなかつたはずである。都の貴顕と渡り合うには、知性・礼節・教養などが必要であつたにちがいない。慈円との和歌贈答は、頼朝の人となりが試される機会であつた。慈円は頼朝とのやり取りを通じて、「尤希有歟」「尤為珍事」「為珍事」と書きとめている。驚きであるとともに称賛のことばといえよう。対等の応酬と感じたであろうか。頼朝が、「周易」の「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意」を踏まえた和歌の表現

を理解して、歌を返してきたことも「希有」「珍事」と評した一因だつたと思う。

注

(1) 「十訓抄」(第十・可<sub>三</sub>庶<sub>二</sub>幾才芸<sub>一</sub>事)も、この歌を「おもしろく、たくみにこそ聞こゆれ」と誉めている。

(2) 「壺のいしぶみ」については、佐々木忠慧「つづほのいしぶみ」考証稿(「宮城学院女子大学研究論文集」第五十二号・一九八〇年六月)、鈴木正道「文学に現れた「壺の石碑」(三)」(「慈円研究序説」一九九三年六月・桜楓社、所収)、上宇都ゆりほ「慈円・頼朝贈答歌についての一考察——「いかごのうみ」と「つほのいしぶみ」を中心として——」(お茶の水女子大学「人間文化研究年報」第十八号・一九九五年三月)、及川道之「源頼朝と陸奥の歌枕——「磐手」「信夫」「壺のいしぶみ」——」(「日本文学風土学会記事」第四十号・二〇一六年三月)、久保田淳「壺の碑」(「花のもの言う——四季のうた」二〇一二年六月・岩波書店、所収)などがある。

(3) 本田清氏は、「書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意」について、「中国人のいたく好むところとなり、書翰の終りなどに慣用語としてよく引かれる」と言われる(新訂中国古典選『易』一九六六年二月・朝日新聞社、五一八ページ)。

(4) 小島憲之『国風暗黒時代の文学 中上』第二篇・第二章(3)

「萬葉集の文章」（一九七三年一月・塙書房）は、この表現を取り上げ、楼蘭文書や六朝における書簡での例を多数引いている。参照されたい。

(5) 槇野廣造「源宣方」（『王朝千年記』二〇〇一年十月・思文閣出版、所収）、後藤昭雄「文人たちの交友——藤原行成を軸として——」（『文芸論叢』第六十一号・二〇〇三年九月）、「右近中将宣方の為の四十九日の願文（大江匡衡）——源宣方の妻、夫の冥福を祈る」（『本朝文粹抄』二〇〇六年十二月・勉強出版、所収）、拙稿「藤原行成と源宣方——『権記』の記事をめぐって——」（『国文学論叢』第四十八輯・二〇〇三年三月）参照。

(6) 「九牛之一毛」は、多数の中でのごくわずかなこと、問題にならぬほど少ないこと。漢の司馬遷「報任少卿書」

（『文選』卷四十二）に、

仮令僕伏<sup>レ</sup>法受<sup>レ</sup>誅、若<sup>三</sup>九牛亡<sup>一</sup>。二毛。与<sup>二</sup>螻蟻<sup>一</sup>何以異。

とみえる、このほか『世俗諺文』に「九牛之一毛」の項目がある。

(7) 拙稿「『土左日記』の帰京——漢詩文受容をめぐって——」（『国語と国文学』第九十五卷八号・二〇一八年八月）参照。